勝利至上廃し 長期的経験積む

野球少年の未来のために

中

「堺ビッグボーイズ」コーチ 阪長さん トーナメントをリーグ戦に

大阪府にある少年硬式野球チーム「堺ビッグボーイズ」は横浜DeNAの主砲、筒香嘉智選手や埼玉西武ライオンズの森友哉選手ら何人ものプロ選手を輩出してきた。そんな名門チームが5年前から始めた「改革」が野球界で注目を集めている。その改革とは、25年間続けてきたチーム主催のトーナメント戦をやめ、総当たり式のリーグ戦に変えたことだ。【神内亜美】

リーグ戦は中学1～3年生まで学年別に分け、3カ月の日程で行う。ルールも変更した。中学1年生は変化球禁止、2年生以上の球種はチェンジアップかカーブのみ。投球数制限も設けた。

その狙いは何なのか。コーチの阪長友仁さん(37)によると――。トーナメント戦は負けたら次がない。それが選手や監督のプレッシャーとなり、いい投手ほど勝ては勝つほど連投を強いられ、肩や肘を痛めてしまう。「自分たちの主催する大会が選手たちを苦しめている」。そんな矛盾に気付いたのだという。

リーグ戦になってから、それまでとは違う光景が見られるようになった。例えば、1死三塁の場面。決まってスクイズのサインを出していた監督が「思い切って振れ！」。3ボール1ストライクでも「フォアボールはいらないぞ」と積極性を求める指導者が目につくようになった。ある監督は目からうろこが落ちたかのように、こうつぶやいたという。「ずっと勝つなきゃいかん思ってたけど、思い切ってやってええもんやな」

実は、堺ビッグボーイズはそれ以前から自主的に投球数や変化球の制限をしていた。転機は約10年前。2年連続で全国制覇を果たしたが、選手のほとんどが高校で野球をやめてしまっていた。代表の瀬野竜之介さん(48)は、はたと気づく。「選手たちの表情が勝つことを課せられたロボットみたいに硬かった」。以来、選手主体の練習に切り替え、海外の指導方法にも目を向け始めた。そんな時、「中南米の野球は面白いですよ」と声をかけたのが当時海外で指導していた阪長さんだった。

阪長さんは新潟明訓高校で1999年夏の甲子園に出場、立教大野球部では主将を務めた。2006年からは日本を飛び出し、スリランカ、タイ、ガーナ、コロンビア、クアテマラなどさまざまな国で指導したり、その国の指導方法を学んだりした。とりわけ衝撃を受けたのがドミニカ共和国。メジャーリーガーを何人も輩出している野球大国だ。小学生を教える時は「野球を楽しむ」ことに重点を置き、中学生には「ポジティブに」「アグレッシブに」と指導する。根底にあるのは、将来有望な選手に育てることが指導者の使命という意識だった。長期的な経験を積むことが目的だからこそ、失敗を恐れずチャレンジできる環境があるという。

阪長さんは14年に堺ビッグボーイズのコーチに就任して以来、瀬野さんと二人三脚でドミニカ式の指導を取り入れながら、全国での普及活動にも力を入れている。リーグ戦に切り替えたのもその流れの一つだ。

だが、長年の「習慣」を変えるのは簡単ではない。高校野球でもトーナメント戦が当たり前。「甲子園の出場校を決めるために何千ものチームがリーグ戦をやるのは無理でしょ」と阪長さんは言う。「でも、本当は全国大会がなくても成長できる場があった方がいい。海外には高校生の18歳をピークとする大会はない。日本は、良い選手を輩出している監督よりも、甲子園で活躍する監督が評価され、そこに選手も集まっていく。目先の目標に縛られ、将来のために野球の経験をしっかり積める環境を整えられていない」と指摘する。

甲子園は多くの球児の憧れの舞台だ。「そこでら、全国での普及活動にも力を入れている。リーグ戦に切り替えたのもその流れの一つだ。

だが、長年の「習慣」を変えるのは簡単ではない。高校野球でもトーナメント戦が当たり前。「甲子園の出場校を決めるために何千ものチームがリーグ戦をやるのは無理でしょ」と阪長さんは言う。「でも、本当は全国大会がなくても成長できる場があった方がいい。海外には高校生の18歳をピークとする大会はない。日本は、良い選手を輩出している監督よりも、甲子園で活躍する監督が評価され、そこに選手も集まっていく。目先の目標に縛られ、将来のために野球の経験をしっかり積める環境を整えられていない」と指摘する。

甲子園は多くの球児の憧れの舞台だ。「そこで燃え尽きても構わない」。そんな言葉を口にする選手は少なくない。けがを押しての出場を「美談」として持ち上げがちなマスコミの風潮にも責任があるかもしれない。

野球関係者とマスコミを対象にしたセミナーで、メジャーリーグの投球数制限について説明する阪長友仁さん＝東京都中央区日本橋室町で2018年4月16日

楽しめる環境づくりを

DeNA・筒香選手

球数・練習時間の制限「必要」

阪長さんは5年前、筒香選手の希望で、ドミニカ共和国の野球見学をコーディネートし、15年オフシーズンにドミニカ共和国のウインターリーグ参戦を実現させた。それを機に、2年前から堺ビッグボーイズ「小学部」の〝スーパーバイザー〟に就任してもらった。共通しているのは「日本の野球をよくしたい」という思いだ。

その筒香選手が1月25日、東京都内の日本外国特派員協会で育成年代の指導のあり方をテーマに記者会見した。過度な指導や勝利至上主義の問題点を指摘し「大人が中心ではない。子供たちの将来を考えてあげることが一番」と訴えた。

「小さい子供が無理をし過ぎて手術する、けがで野球を断念するケースを何度も見てきた」という筒香選手は、日本では過密日程になりがちなトーナメント制が広く採用されている点に言及。「選手の成長より、目の前の試合に勝つことが優先されている」と指摘し、リーグ戦の導入や球数、練習時間を制限する必要性を強調した。

高校野球での投手の連投にも触れ「教育の場と言いながらドラマを作る部分もある」と養蟲を鳴らした。野球人口の減少に危機感を抱く日本屈指の長距離砲は「子供の将来を考え、楽しめる環境を作れば、野球人口は増えていくと思う」と言葉に力を込めた。（一部既報）

【神内亜美、細谷拓海】

野球指導現場の変革を訴えるDeNAの筒香嘉智選手＝東京都千代田区丸の内の日本外国特派員協会で1月25日